

礼 拜 指 針

前 文

礼拝は、キリスト教会の宣教の基本である。神を礼拝するとは、御自身を私たちに啓示され、私たちを招集し、御自分の民であると宣言された神に対する従順を行いに表わすことである。礼拝の創始者は神であり、礼拝の中心は神である。神、そして神の救いと創造の御業は、礼拝の対象でもあり、また主体でもある。礼拝することは、福音を余すところなく豊かに、しかも簡潔に、再現することである。

礼拝において、私たちは自分たちが神の民であることを見出し、それを表現する。礼拝において、私たちはこの世界で今も進んでいる神の救いの御業に参画し、また、私たちが造り、贖い、生かして下さる御方に対して自分たち自身を新しくお献げするのである。私たちが礼拝するのは、私たちが神の民であり、神が私たちの神であるからに他ならない。

キリスト教の礼拝の基調は、神への賛美である。神が神であられるがゆえに、そして神がなして下さり、また、なすと約束して下さったことのゆえに、他に比類のない神の揺るがぬ愛を称え、神を賛美するのは正しいことである。

キリスト者は、イエス・キリストの名によって礼拝する。すなわち、イエス・キリストの力、イエス・キリストの自由において礼拝するのである。イエスは、その誕生と生と死と復活を通して神への完全な礼拝を献げられた。私たちキリスト者は、その賛美の完全な表現に加わることが許されているのである。それゆえ、イエス・キリストの生涯と宣教はキリスト者の礼拝の中心であり、すべての礼拝はキリストの生涯と宣教を映しだし、またそれによって形作られることを求めるのである。イエス・キリストは活ける言であり、キリスト者の礼拝を成り立たせるのはキリストの臨在と霊のみである。

また、私たちは人間として、欠乏感に迫られて礼拝することを知っている。私たちは自分自身では満ち足りることができないのであり、造り主と出会い、礼拝することによって、完成と充足を経験するのである。礼拝するとは、人間が人間になることである。

キリスト者はいつでも神を礼拝することができる。すべての時は神により、イエス・キリストにあって贖われているからである。けれども、キリスト教礼拝の最初から、一つの日が共同の礼拝のために特別に選び分かれた。主の日である。この日は週の最初の日である。そして、イエス・キリストが死人の中から挙げられたのがこの日であるがゆえに、共同の礼拝に相応しい日とされたのである。イエスに従った者たちが空の墓を見つけ、復活の主とお会いしたのは、「週の最初の日」であった。従って、キリスト者の礼拝に定められた日は、イエスの復活を想起する日なのである。礼拝に集うキリスト者たちにとっては毎日曜がイースターであり、共同の礼拝はいつでも、救い主イエスの復活によって示された神の勝利の祝典である。

主の日は、また、創造の第一日の記念である。週の最初の日には神は創造を始められ、そして同じようにして週の最初の日には、神はその「新しい創造」を開始されたのである。従ってこの日はあらゆる良きことにとって基本であると考えられる。神は世界を造り、それ

を良しとされた。イエス・キリストにあって神は世界を贖い、それが良いものであることを新たに宣言された。キリスト者は主の日の礼拝で、神の創造と救いを想起し、祝う。神が世界を造りそれを良しとされたこと、そして、神がすべてを新しいもの、良きものとされた決定的な行為を想起し、祝うのである。一つの日を主の日と定めることによって、キリスト者は、すべての日に、そしてあらゆる被造物にとって真実なこと、すなわち、イエス・キリストが全被造物の主であることを、明らかに示すのである。

I . 共同の礼拝

神はイエス・キリストによって一人一人を贖い、キリストのからだである教会の構成員として、神ご自身との関係、そして人間同志の関係に入れられる。であるから、キリスト教の礼拝は、何よりも共同的なものと理解される。つまり、個人は信仰共同体の肢体として自己の真の意味を見出だすのであり、個人の礼拝は共同体の信仰と賛美と切り離されて存在するのではない、ということである。さらに言うならば、次のように強調するのは相応しい。即ち、共同の礼拝が個人的礼拝の中身と形を整えるために必要であるのと同様に、個人のあるいは私的な礼拝はキリスト者の生活に不可欠の要素であり、共同の礼拝を十分に深く真摯なものとするために必要である。

教会の共同の礼拝は、また、家庭で守られる礼拝にも方向と焦点と形を与える。家庭礼拝は共同の礼拝によって導かれ、それに与かる者たちは、礼拝共同体の一員としてその礼拝を守っているということを知っている。実際、家庭礼拝は大いに奨励される。聖書朗読、祈り、讃美歌、そして個人の証しは皆、家庭礼拝の重要部分である。

A . 共同の礼拝の順序

キリスト者の群れは、その礼拝の順序について良く考慮すべきである。順序と様式が必要であるのは、単に、礼拝が社会的行為であり、一つの集団が責任ある行為を遂行するには一定の形式が必要だからというだけではない。神はご自身を啓示される究極の行為として、ある特定の形を選ばれたからである。それは、イエス・キリストの受肉、十字架、復活、そして昇天である。

キリスト教の運動の歴史を通して、順序と様式は共同の礼拝にとって重要であり続けて来た。そればかりか、聖霊の導きの下に共同の礼拝のある基本的な形と様式が長い年月を経て出来上がり、それがキリスト者たちに受け入れられて来た。この基本的な様式の中心は、神の民の賛美と祈り、神の言葉の告知、および聖礼典の執行である。これらの強調点は特定の位置と表現を与えられ、そのことによって、それが多様な構成要素と動きからなる一

つの礼典的ドラマとして、他の中心点や礼拝全体の目的との関係の中で展開されてきたのである。

しかしながら、共同の礼拝の、唯一の「正しい」あるいは「完全な」順序、様式というのはあり得ない。むしろ、共同の礼拝を準備する者は、教会の礼拝の目的や意図、自分たちの礼拝的伝統を弁えると共に、その礼拝をする特定のグループ、特定の状況に対して、何が適当であるかを考えるべきである。

共同の礼拝は人々の礼拝であるということを常に念頭に置かなければならない。礼拝者は、少数の人々がすることを眺める観客ではなく、神と神に呼び出された人々とが出会う相互的な行為に、礼拝の司式者と共に関与する参加者である。また、礼拝を導くものたちは、彼らもまた礼拝者であり、彼らの務めは集ったもの全員が神を礼拝できるようにすることであることを良く覚えるべきである。

礼拝の順序は、共同の礼拝から自発性を締め出すためのものではない。むしろ、自発的要素を予想しながら礼拝を組み立てるべきである。様々な応答の仕方は、それが礼拝者にとって意味のあるものならば人々の礼拝に組み入れられるし、心からの自然な賛美や告白の表現は奨励されるべきものである。

カンパ・ランド長老教会は今まで一度も公式の礼拝式を採択したことがない。キリスト者の群れのための共同の礼拝を作る責任は、各教会会議に存する。各個教会の場合、共同の礼拝の作成の責任は、牧師の指導のもと、小会がこれを負う。他の教会会議は、その会議の管轄下にキリスト者の群れが集められた時、その人々のための共同の礼拝を準備する責任がある。

御言葉の奉仕者である教職者は、共同の礼拝の順序を組み立てることに特別の責任を有している。教職者はキリスト教礼拝の歴史と神学に関して教育を受けており、共同の礼拝の指導にあたるすべての人たちを、強力に指導することが期待される。

B．共同の礼拝の内容

礼拝を準備しまた参加する者は、キリスト者が歴史的に礼拝の妥当で必要な表現と見做してきた諸々の行為を、良く考慮にいれるべきである。それらの行為は、神を礼拝するために集まる者たちが、動作によって何をなし、言葉によって何を語るかを想起し、理解するのを助けてくれる。

1 <神への賛美> 神を礼拝するところには神賛美がある。キリスト者は、神が神であるがゆえに、神がなして下さったことのゆえに、今なしつつあることのゆえに、そしてなすと約束して下さったことのゆえに、神を賛美する。私たちは、神がすべての生命にとって至高の主であるがゆえに、神を賛美する。

2 <罪の告白> キリスト者は贖われた者たちであり、贖われた共同体の肢体として礼拝を献げるが、その生活の中に罪は依然残っている。共同の礼拝は伝統的に、キリスト者

がその罪の深さを認め、神に対して罪を告白する場を設けてきた。

3 <宣言> キリスト者が礼拝するときはいつでも、福音が宣言されるべきである。福音とは良き知らせであり、歴史、特にイエス・キリストにおける神の究極的啓示を通して、神が人間に示されたことの中に位置するものである。礼拝において、キリスト者は神の愛と恵み、裁き、和解、赦し、憐れみについての良き知らせ、そして神の恵み深い招きを、宣べ伝え、また聞く。

4 <信仰の表明> 信仰共同体はその信じるところを通常の礼拝において表明する。そこで言い表された信仰が、キリスト者の生活を形作り、また、キリスト者の生活の一部である希望と期待を表現するのである。

5 <奉献> 神の民の礼拝は、献げる行為なしには不完全である。言うまでもなく、礼拝ごとに神は御自身を礼拝者に新たに与えておられるのである。それと同時に礼拝においては、そこに集うものたちが神に形作られ、強められ、導かれ、変えられるように、自分自身を神に献げるのである。そして礼拝者は神に祝福され用いられることを願って、贈り物を神に献げるのである。

6 <献身と派遣> 共同の礼拝は、世界との関わりを決して失わない。礼拝において礼拝者は全世界のことを考える。そして、神に仕え、世界の中で起こりつつある神の救いの業に参加するために、この世に出ていくよう力を与えられる。礼拝の中で、悔い改めと信仰の行いを持って応答し、イエス・キリストの御名によって神と他者に仕える誓約を行っても良い。献身と派遣の行為が礼拝の中で行われるのは相応しいことである。

7 <聖礼典の執行> 主の晩餐と洗礼の聖礼典は、神がご自身をお与えになったことのあるしるしの行為であり、神の恵みが私たちにもたらされるための手段である。聖礼典はキリスト者の礼拝に独自の意味を与えるものであり、恵みの契約の主たるしるしである。

共同の礼拝においては、いつもこれらの行為をすべて取り入れるのは良いことであるが、全部を行わなければ正式な礼拝にならないというわけではない。しかしながら、ある一定の期間の間には上でのべられた行為のすべてが行われるべきであり、礼拝立案に携わるものはそれが守られるよう考慮すべきである。

C . 共同の礼拝の基本資料

礼拝を立案する者が用いる資料は、礼拝自体の目的と意図と合致するか否かによって試されなければならない。教会が歴史的に用いてきた資料は次のものである。

1 <聖書> 聖書は書かれた神の言葉であり、キリスト者の生活と教会の生活の全局面において卓越した地位を有する。

共同の礼拝においては、つねに、聖書は一か所またはそれ以上朗読されるべきである。

礼拝において聖書を朗読する者は、選ばれた朗読箇所を熟知し、他の礼拝者が容易に聞

き取れるような仕方で朗読することが求められる。聖書箇所を選択は、ある一定の期間には聖書の証し全体が礼拝の一部として読まれるように行うべきである。

礼拝の中での聖書朗読に加えて、聖書はまた開会の言葉や招詞、聖礼典への招き、赦しの宣言、祝福、祈り、宣言の基本資料である。実際、聖書そのものが神の言葉を宣言するのである。

2 < 祈り > 祈りはキリスト者の生活と切り離せない。キリスト者になるとは、祈ること、そして他者と共に祈ることである。それゆえ、祈りはキリスト教礼拝の不可欠の要素である。

キリスト者の祈りは、第一義的には神から何かを「受ける」ことを求めるものではなく、自分が被造物であることの表現、創造主なる神への依存の表現である。祈祷の主たる目的は、(1) 神の臨在に触れ、神の審判と恵みと力を新たに経験すること、(2) 神を賛美すること、そして、(3) 神を私たちの世界、私たちの生活へとお招きすることである。

共同の礼拝におけるすべての祈りは、主の祈りに学ぶことができる。主の祈りを礼拝の重要な部分として習慣的に用いるのは望ましいことであり、その祈りの本質と性格はすべての祈りの模範とされるべきである。

またキリスト者には、教会の歴史の中で受け継がれてきた祈りがあり、それらを礼拝の中で祈り、また、礼拝の中で祈られるすべての祈祷の模範として用いることができる。私たちが困んでいる「おびたしい証人の群れ」の祈りは、私たちの祈りでもある。それらの祈りによって、すべての聖徒が、生ける者も死ねる者も共同の礼拝に加わるのである。

この祈りの伝統を基礎として、またそれに加える形で、礼拝のための新しい祈りを編み出すことは正しいことである。しかし、新しい祈りを編み出すにせよ、古代の祈りを新たに祈るにせよ、最も重要なことは、それが教会の祈りの伝統に一致しているということである。

祈りが書かれているかそうでないかは重要なことではない。大切なのは、通常祈りは前もって準備されていること、また、礼拝者全員がその祈りに心から加われるように祈ることである。

祈りには色々な要素があるが、以下のものを特に挙げることができる。神への賛美と崇拜、罪の告白、感謝の奉献、他者のための執り成し、祈願と明け渡し、私たち自身と賜物の奉献。

3 < 音楽 > キリスト者共同体の初期の記録によれば、音楽が信仰者の礼拝の欠くことのできない部分であったことは明らかである。賛美と祈りを歌うことは、大切な意味のある習慣であった。

音楽は、礼拝者がよりよい礼拝を献げることができるよう助けてくれる。したがって、音楽によって、人々が神と神の御旨に焦点を合わせ、神の臨在を経験し、霊とまことをもって神を礼拝できるよう導くのはどうしても必要なことである。

音楽の選択には最大の注意が求められる。音楽の質や、それがキリスト教礼拝に相応し

いかどうか、その特定の礼拝者たちに馴染むかどうかを考えなければならない。

4 <讃美歌、霊歌、およびゴスペル・ソング> 代々キリスト者は礼拝の中で自分たちの信仰を歌ってきた。讃美歌と霊歌とゴスペル・ソング（福音唱歌）は、その内容や焦点に違いがあるので、賛美、罪の告白、福音の宣言、献身、信仰の確認など、礼拝の中の色々な異なった行為に合わせて用いることができる。

これらの礼拝資料を用いるとき注意すべきことは、歌詞が聖書的真理を表わしていること、曲が音楽的質を保っていること、また、それを歌う人々に合っていることである。

5 <説教> 共同の礼拝において、説教は福音の宣言の中心である。その目的は、全出席者がもう一度神の良き知らせによってとらえられ、その生が新たに神の支配のもとに置かれ、神の召しに従う応答へと招かれるように、福音を提示することである。

説教は、聖書に基づき、聖書によって形成されるものである。説教を準備するにあたっては、福音の全側面が宣べ伝えられるように聖書全体によって教え導かれることが必要である。説教テキストを選ぶ方法としては、何らかの形の聖書日課など、秩序だった聖書箇所を選択が望ましい。

説教者は、言葉の伝達の方法に細心の注意を払いつつ、御言葉を語るべきである。

6 <信条> 信条は信仰共同体の信仰を表現する一つの形態である。聖書には多様な礼拝者の群れの信仰を要約した信条的声明文が数多く存する。申命記6章4 - 5節、同26章5 - 9節、第一コリント15章3 - 7節、フィリピ2章6 - 11節などは、共同の礼拝で用いられる代表的な信条的箇所である。

使徒信条やニケア信条などの古代信条は、今日でも礼拝において重要な働きをしている。それに加えて、個人の信仰や共同体の信仰を礼拝の中で表現する手段として新しい信条も作成されてきた。聖書の証言と合致している限り、キリスト者は、礼拝のために新しい信条を書くことができる。

D．礼拝順序の基本型

全キリスト者に当てはまるただ一つの礼拝順序というものはないが、あらゆる礼拝に示唆を与え得る一つの古典的型は存在する。それは、神の行為と私たちの神への応答という型である。以下に示すキリスト教礼拝の順序は、その古典的型に基づいている。第一の順序は主の晩餐の執行を含むものである。主の晩餐はキリスト教の礼拝を独自のものとする行為だからである。

1 <主の晩餐を含む共同の礼拝>

前 奏

礼拝はキリスト者が礼拝の場へと赴き、共に神を崇めるために集まるところから始まる。前奏に選ばれた音楽は、人々が神そして神の国へと集中していく助けをする。礼拝者には、前奏が彼らの献げる礼拝の一部であることを教えなければならない。前奏は「雰囲気造り」

でも礼拝のための「準備をする」時間でもない。おそらく、前奏が始める前に鐘を鳴らすことや、礼拝の開始を司式者が何らかの合図で示すのは、助けとなるであろう。司式者が「神を礼拝しましょう」とだけ言うのも良い。それから前奏を始めるのである。

開会の言葉

伝統的には、礼拝の始めの言葉は常に、神、そして、神と私たちの関係に関する聖句が用いられてきた。長老教会の伝統では詩篇 124 篇 8 節、「わたしたちの助けは、天地を造られた主の御名にある」が代表的である。開会の言葉として用いられる聖句は他にも多くある。交読するのも良い。しかしどの聖句を用いるにせよ、それは、なぜ自分たちが礼拝の場へと集まって来たのか、自分たちは何者であるのかを強調するものである。聖書以外の言葉を用いるときは、その内容と意図についての注意深い検討が必要である。

頌栄の歌

キリスト教礼拝の最大の目的は賛美である。賛美は、神がイエス・キリストにおいて贈って下さった言葉で言い表せぬほどの恵みに対する、人々の喜びの応答である。それゆえ、主の民が開会の言葉に続いて神への褒め歌を歌うのは、まことに相応しいことである。ここでの讃美歌は、その曲と歌詞が神の偉大さ、威厳、愛、素晴らしさを謳っているものでなければならない。

賛美の祈り

通常、頌栄の歌に続く祈りは、引き続いて主を賛美し、ほめたたえる祈りである。この祈りは神を称える祈りであることに留意し、礼拝の中で祈られる他の祈りはそれぞれ他の祈りの眼目を持っているということを忘れてはならない。

罪の告白と赦しの宣言（確証の御言葉）

罪の告白と赦しの宣言は、それがキリスト者の生活に不可欠であると同じように、礼拝にも不可欠である。歴史的にはこの行為は二つの場所のうちのどちらかに置かれてきた。一つは頌栄の歌・賛美の祈りの後であり、もう一つは主の晩餐の前である。

聖句を用いて、礼拝者を罪の告白へと招くのは正しいことである。招きの後、告白の祈りが続く。この祈りは多くの場合、全員で声を合わせて祈るのがもっともよい。誰かが全員を代表して祈る場合は、それが本当に皆の共同の祈りになるよう、よく準備した上で思慮を持って祈らなければならない。

告白の行為の後に、力強い保証、あるいは赦しの宣言がなされる。ここでもまた、聖書が最高の宝庫であり、そこから読まれる言葉には何の説明も加える必要がない。一例として、第一ヨハネ 1 章 9 節はしばしば用いられる。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。」

賛美の応答

罪の告白と赦しの宣言の後に相応しいのは、賛美の応答である。この応答はいくつかの形を取り得る。教会は長く、詩篇歌と頌歌（カンティクル＝詩篇歌以外の聖書から取られた歌）をこの目的のために用いてきた。詩篇朗読の後に讃栄（グロリア・パトリ）あるいは

は他の賛美の応答を斉唱するのは適当である。

神の言葉の聴聞

神の言葉を朗読し、告げ知らせ、それを聴くことが、礼拝式の第二の大きな展開を構成する。私たちは聖書の朗読と福音の説教を通して私たちに告げられる神の言葉を聴くために集まるのである。そこでは御言葉の告知が中心であり、最重要である。

聖書朗読は福音の告知にとって非常に重要である。朗読する者は誰でも、明瞭に朗読する能力を有し、十分な準備を行うべきである。

朗読する聖書箇所を選ぶに際しては、礼拝者が神の言葉の豊富且つ多様なメッセージに触れることができるよう、十分な考慮を払うべきである。

共同の礼拝のための聖書日課を用いるのは非常に望ましいことである。聖書日課は、聖書の中の多くの主題が読まれ、福音の宣教の基礎として用いられるようにする、聖書を組織的に配列したものである。伝統的に聖書日課は、教会暦に沿って構築され、各日曜に読まれるべき聖書箇所を指示するようにできている。礼拝を企画する者が聖書日課を自分で作るのもよい。

通常、聖書朗読は、神の言葉を受けることができるよう神に願う「照明を求める祈り」の後に置かれる。

聖書朗読と聖書朗読の間に、特別賛美（聖歌隊や独唱者などの賛美）頌歌、あるいは讚美歌を挿入するのは適切である。

最後の聖書朗読の後に説教が続く。説教は通常、朗読箇所のうちの一つ、またはそれ以上から行われる。説教が礼拝の一貫性を損なうことがないように、また聖書の証言を曲げることがないように、気を付けなければならない。説教の後に、祈り、あるいは栄誦（栄光を神に帰する言葉）が続くのは適切である。

信仰の告白あるいは信条

礼拝者が信仰を告白することは、キリスト教史の初期から、共同の礼拝の中心部であった。歴史的には、信条の朗唱は個人的な信仰の告白が、礼拝者が主の晩餐に与かるための条件であった。「私は・・・を信じます」と進んで言い表す者のみが、神の民の食卓に加わることを許されたのである。信条、あるいは信仰の告白はまた、今聴いた神の言葉への応答でもある。礼拝者の信仰を表現するために、これに加えて、相応しい讚美歌を歌うのも良い。

共同の祈り

信仰の告白に続くのは、共同の祈りである。これは、教職者が信徒が献げ、会衆が「アーメン」と応答することのできる祈りである。

共同の祈りは、感謝と祈願、執り成しを含み、主の祈りをもって終わっても良い。感謝は、礼拝参列者全員に共通する感謝を表わし、それは教会への感謝を含んでも良い。祈願は、礼拝者の個人的必要と共同の求め両方のために祈る。執り成しは、礼拝に出席していない人たちの特別な必要のために祈る。特に教会のメンバーでない人々の必要のために祈る。

る。主の祈りはあらゆる祈りの模範であり、礼拝者がイエスの求められたところに従って祈ることができるよう助けてくれる。

奉 献

歴史的には、共同の礼拝における奉献は、主の晩餐で用いられるパンとぶどう酒が献げられる場面であった。今でもパンとぶどう酒を聖餐桌に運んでくるのは相応しいことである。もしそれらが既に卓上に置かれているならば、このときに主の晩餐の準備をする。

お金や他の献げものは、この時点で献げられる。献金は礼拝の行為であり、神のこの世界での救済の働きに対する、個人としてのまた共同体としての献身の一つの象徴である。たとえある礼拝の中に献金が含まれないとしても、何らかの献身を表わす行為を礼拝に含むのは正しいことである。奉献に続いて、賛美の行為として頌栄を歌っても良い。献身の祈りをもって奉献の行為を閉じても良い。

主の晩餐の祝い

主の晩餐を祝うことはキリスト教礼拝の中心である。この礼拝の行為において、見える言葉が提示され、それが福音の告知に結びつく。説教と聖餐は一緒になって、キリストの死と復活における神の救いの御業を証しするのである。聖餐を礼拝の中で守ることは、常に相応しいことである。

主の晩餐を守るに際しては、礼拝を企画する者は、この儀式の中で伝統的に行われてきたことを基本として考えるべきである。それらの行為は違う名称と呼ばれ、違う見出しの下にまとめられているかもしれないが、基本的には次のものである。

- (a) 主の食卓への招き。司式の教職者は、イエス・キリストを主また救い主と信じる者全員をこの祝典へと招く。
- (b) 制定の言葉。司式者が聖餐桌で、この祝典の根拠をなす聖書箇所を読むか、あるいは暗誦する。適当な聖書箇所は、第一コリント 11 章 23 - 26 節、マタイ 26 章 26 - 30 節、マルコ 14 章 19 - 26 節、そしてルカ 22 章 19 - 20 節である。イエスが復活後に弟子たちに会い食事を共にしたことに関する他の聖書箇所を用いても良い。
- (c) 感謝の祈り。この祈りには普通、神が神であられること、神がイエス・キリストにあってなして下さったことへの感謝、聖霊の注ぎを求める祈り、そして神への全き献身が含まれる。
- (d) パン割きとぶどう酒の注ぎ。ここでの行為は最も重要である。パンを割きぶどう酒を注ぐ動作は、私たちすべてのためにキリストのからだが割かれ、その血が流されたことを劇的に思い起こさせてくれる。したがって、これらの行為は注意深く、また、会衆全体にはっきりと見えるように執り行なわれることが大切である。十分な大きさのパン一斤、そして、杯と器が必要である。ぶどう酒を注いだ後、皆が見えるように杯を掲げるのもよい。注ぎの行為を省略する場合にも、杯を掲げるのが良い。

(e) 分餐。教会の生活と礼拝の中で、異なった幾つかの分餐の流儀が生まれてきた。カンパ - ランド長老教会では伝統的に、礼拝者が会衆席で聖餐に与かる方式を取ってきた。このやり方では、まず教職者がパンとぶどう酒を頂き、次に治会長老が与かり、それからその長老たちが会衆に配餐するという順序を取ってもよいし、あるいは、教職者と長老が最初に会衆に配餐し、その後でお互いにパンとぶどう酒を与えあうという順序でもよい。

もう一つの用いられてきた流儀は、会衆を前に招きそこで教職者と長老が給仕するという方式である。また、礼拝者を前に招き、そこで食卓に着かせてから給仕するという方式もある。

どの流儀においても、礼拝者は立って受けてもよいし、また着席して、あるいは跪いて受けてもよい。

全員が一つのパンから食べ一つの杯（伝統的に「共杯」と呼ばれてきた）から飲むのが、最も意義深く感じられるというのが、多くの礼拝者の経験である。教会によっては、共杯を教職者と治会長老のみに用いるところもある。

(f) 聖餐後の祈り。分餐の後、賛美と献身そして執り成しの祈りを祈ってもよい。この祈りの後、教会の頌歌または讃美歌が続くのも相応しいことである。

(g) 解散 / 派遣 / 祝祷。礼拝の終了は、閉会を告げる解散の合図によってもよいし、神の民としてこの世に出ていくようにという派遣の言葉によってもよいし、あるいは人々の上に祝福を宣言することによってもよい。この三つの組み合わせによってもよい。これには、聖書の言葉を用いるのが良いであろう。

後 奏

前奏と同じように、この奏楽も共同の礼拝の性格を良く弁えて選ばなければならない。さらに言うならば、もし後奏を礼拝の一部と考える場合は、全出席者は後奏を静まって聞き、その行為も礼拝の一部とすべきである。その場合は、後奏は、特別の場合を除き、短いものが選ばれるであろう。もし後奏を礼拝の一部と考えない場合は、それを礼拝の順序からは外し、礼拝本体は解散あるいは祝祷をもって閉じるという形にすべきである。

報 告

礼拝を計画する責任のある者は、必要な報告を行うことがどのように礼拝に関係づけられるかをよく考える必要がある。一つの方法としては、週報に必要な報告事項を載せ、会衆はそれを読むものとして特に礼拝の中ではそれについて触れない。また、礼拝を始めるに先立って報告をするようにしてもよい。礼拝の後に報告を行うという選択肢もある。

報告は礼拝の一部として行うのが賢明なことであると考えられる教会は、それをどの様にして礼拝を妨げずに行うかを考えなければならない。一つの可能性は、共同の祈りの直前に報告を行い、報告で分かち合われたことを祈りに取り入れることである。共同の礼拝の一部として礼拝が行われるときはいつでも、教会の伝道に直接関係がある事柄、礼拝共同体の全員に分かち合われるべき事柄に報告を限定すべきである。

2 < 主の晩餐を含まない共同の礼拝順序 1 >

前奏
開会の言葉
頌栄の歌
罪の告白への招き
罪の告白の祈り
赦しの宣言
詩篇朗読
讃栄（グロリア・パトリ）
照明を求める祈り
聖書朗読
説教
栄誦
信条
讃美歌
共同の祈り
奉献
奉献の特別賛美
献身の祈り
讃美歌
祝祷

3 < 主の晩餐を含まない共同の礼拝順序 2 >

前奏
開会の言葉あるいは招詞
賛美の祈り
頌栄の歌
罪の告白の祈り
赦しの確証
交読文
讃栄（グロリア・パトリ）
奉献への招き
奉献
頌栄
献身の祈り

照明を求める祈り
聖書朗読（一箇所、または複数箇所）
共同の祈り
説教
聖別の祈り
祝祷
黙祷
後奏

4 < 主の晩餐を含まない共同の礼拝順序 3 >

前奏
開会の言葉あるいは招詞
入堂の讃美歌
賛美の祈り（一同起立）
罪の告白の祈り（一同着席）
赦しの確証
詩編
讃栄（グロリア・パトリ）
聖書朗読（一箇所または複数箇所）
特別賛美
説教
信条
奉献
共同の祈り
主の祈り
退堂の讃美歌
解散と祝祷、あるいは解散か祝祷
後奏

E . 主日礼拝以外の礼拝順序

キリスト者の群れが集って礼拝を献げる機会は、主の日以外にも色々と考えられる。家庭礼拝を持つことは望ましいし、教会の様々なプログラムが礼拝を含むことは大変適切である。また、週日にキリスト者が集まって祈りと賛美を共にする機会を持つのもよい。以下に掲げる順序は、必要ならば多少変更を加えて、任意に用いることが奨励される。

礼拝順序 1

前奏
招詞（聖句）
讃美歌
交読文
讃栄（グロリア・パトリ）
聖書朗読
祈祷
讃美歌
祝祷
後奏

礼拝順序 2

招詞（聖句）
頌栄の歌
罪の告白
赦しの確証
頌栄
聖書朗読
特別賛美
祈祷
讃美歌
黙想
派遣と解散

礼拝順序 3

前奏
開会の言葉、あるいは礼拝への招き
讃美歌
聖書朗読
聖書による黙想、あるいは、聖書の簡潔な説き明かし
祈祷
讃美歌
閉会祈祷

礼拝順序 4

讚美歌
聖書朗読
聖書の簡潔な説き明かし
黙禱
主の祈り
解散と祝禱、あるいは解散か祝禱

F . 共同の礼拝の指導

総 論

共同の礼拝を導く者は、思慮深く、責任感に富み、創造的であることが肝要である。指導力が弱く、注意に欠け、ずさんだと、神の民の礼拝が著しく損なわれる。司式の目的は、礼拝者が一体となって神に賛美と忠誠を献げ、礼典的ドラマに参加し、礼拝者の生を御手のうちに勝ち取られた神に心から応答できるよう導くことである。司式者は、礼拝の所作と言葉に関して、人々を導く。

礼拝を司式する唯一の方法というものはない。司式の形は、その時々状況と、司式にあたる者(たち)によって異ってくるからである。司式の一般的原则は、会衆のなすべきこと、語るべきことが何であることを示すこと、そして、必要なこと以外はしないことである。以下に記すのは、これに追加する幾つかの指針である。

- a) 他の人々と同じように、一人の礼拝者として礼拝に臨むこと。
- b) 自分自身に注意を引くようなことや、人々の気を礼拝から逸するような行為や発言は慎むこと。
- c) 司式にあたっては、直接的で力強くあること。
- d) すべての言葉と所作について良く準備すること。
- e) すべての指示は簡潔で明瞭であること。
- f) 言葉によらないで会衆をリードする方法を学ぶこと。
- g) 歴史的に礼拝で用いられてきた言葉を取り入れること。

司式者として最も良く用いられるのは教職者であるが、礼拝者を指導する務めは教職者に制限されているわけでは決していない。教会の中の様々な人が礼拝の司式に参加することができるし、それは勧められることである。聖歌隊と奏楽者は、礼拝の中の音楽に関する部分を指導し、また他の信徒は他の色々な形で礼拝指導に参加することができる。しかし、一番大切なのは、礼拝の指導者を務めるものは十分に良く準備ができていなければならないということである。

象徴と祭服

幾世紀にも渡ってキリスト者の共同体は、礼拝を助けるものとして象徴と祭服を用いて

きた。キリスト者は礼拝のために定められた場所において、その巨大な宝庫の中から選び出し、あるいは、自分自身で創造して、象徴を用いることができる。象徴を用いるにあたって肝要なのは、礼拝に集う人たちがその意味と役割をはっきりと理解しているということである。

礼拝指揮者が身に付ける祭服も、また、礼拝を豊かにし質を高めてくれる。聖歌隊や他の奏楽者の着るガウンや教職者のガウン、アルプ、カズラ、ストールなどは皆、正しく導入され理解されれば、有益に用いることができる。祭服は礼拝司式の役割を象徴的に表わし、礼拝者の注意を個人からその人が会衆を代表して負っている責任へと向けることができる。

G．聖歌隊、奏楽者と礼拝

礼拝の中で歌われるすべての讃美に関し、礼拝をする会衆が第一の聖歌隊である。礼拝式におけるリーダーシップを提供するための、補助としての聖歌隊があるところでは、そのメンバーは、会衆がより忠実に歌い讃美できるように、自分たちの特別な賜物を神に献げている礼拝者である、ということ常を常に理解していなければならない。聖歌隊が応唱や特別讃美を歌うとき、それは、教職者が会衆を代表して祈り説教するのと同じように、会衆を代表して歌っているのである。

聖歌隊指揮者その他の音楽担当者は、礼拝を計画、指導するに際して有益な音楽の知識を有している。これらの人々は、教職者や他の礼拝に責任を負う人々と良く協力して奉仕すべきである。特に教職者と奏楽者は、互いの知識や理解を交換し合い、創造的な協働関係を持つべきである。

H．教会暦と礼拝

キリスト者共同体の中で礼拝が発達していった最初の数世紀の間に、教会は、その礼拝の中で福音全体とキリスト教信仰の全領域を確実に告げることができるようにするための体系化の方法を編み出した。この体系化が教会暦として知られるようになったものである。教会暦の主たる柱は、イエス・キリストの誕生、受難、復活、そして宣教に生きる教会への聖霊の注ぎである。福音の多様な側面に適切な関心を払うために、多様な期節（特定の日、週）が設けられた。

礼拝が福音全体を表わすものへと少しでも近づくために、教会暦の期節や特別の日に学ぶことが勧められる。

． 聖 礼 典

キリストによって制定された二つの聖礼典、洗礼と主の晩餐は、完全な形での共同的礼拝を構成する要素である。洗礼と主の晩餐はキリストが私たちと共におられることとしであり、それゆえ、キリスト者が守る定期的な礼拝に含まれる。二つの聖礼典のいちばん重要な点は神の御業であり、神がご自身を与えられたことが水やパンとぶどう酒を通してリアルに示されることである。礼拝の他の部分と同様、それは、最も深い意味において共同の行為であり、キリストの救いの恵み、そして、私たちのために献げられたキリストの恩恵を常に指し示す。それは、特に、私たちをイエス・キリストに結びつけ、私たちをキリストにあって一つとする神の救済の御業を、再現するものである。

聖礼典の力と意味とは、受肉した言、イエス・キリストの臨在にかかっている。それはまた宣教の言葉と繋がっており、受肉の言、宣教の言と切離し難く結び付いている。それは、真の意味で見える言である。言と聖礼典は一つとなって、すべてのキリスト教礼拝の基本を形作る。

A．洗礼と共同の礼拝

洗礼は私たちに対する神の愛のしるし、私たちに届けられたキリストの恵みのしるしである。洗礼において、神は人々を神御自身のものと宣言され、特別にご自分の民として、恵みの契約の相続者として、その人々に印をつけられるのである。洗礼は、罪の赦し、キリストへの接ぎ木、私たちの生活の中への聖霊の到来、そして死と新しい命への復活を象徴する。洗礼は宣言でもあり、確証でもある。それはまだ人間が応答する力を持つ前に神の恵みと愛が人間に届いたとことを宣言し、また、キリストのからだの構成員としての私たちの新しい身分を確約する。それは人々をこの世から選び分かち、イエス・キリストの御業への参加者と認定するのである。

誰も、洗礼において授けられ宣言される神の恵みの賜物を、自分の功績によっては受けることができない。信仰を持って洗礼を受ける者も、信仰者の子どもとして洗礼を受ける者も、キリストにあって、キリストの教会を通して、自由に与えられる神の恵みと赦しに全く依っているのである。

洗礼は教会全体の礼拝の行為である。したがって、それは通常、共同の礼拝の中で執り行なわれるべきである。やむをえない事情によって、通常の礼拝の中で行えない場合でも、教会員が出席し、聖書、宣言、祈禱、会衆の信仰告白を含む式の中で行うべきである。

洗礼の意味と価値は、決してそれを受ける人だけに限られるものではない。その恩恵は会衆全体に及ぶ。それは、洗礼を既に受けている者が、契約共同体の一員であること、自分の人生を神が御自分のものとして下さったこと、無償で与えられた神の恵みと赦しにより頼んでいることを、思い起こさせてくれるからである。

洗礼の本質と性格からして、一人の人が洗礼を受けることができるのは只一度である。一度記されたしるしと証印は一生涯に渡って消えることがない。

洗礼を受けるのに相応しいのは、信仰を得た人、および信仰者の子どもらである。この聖礼典は按手を受けた教職者によって執行されるべきである。

B．洗礼の執行

受洗志願者あるいは受洗する子どもの両親は、洗礼を受けるに先立って、洗礼の意味、および、教会と受洗者にとっての洗礼の意義に関し、牧師と小会から指導を受けるようにすることが望ましい。適切な指導が行われた後で、この聖礼典の執行の日時が定められべきである。それは、教会の通常の礼拝の時とすべきである。

洗礼は共同の礼拝の中の信仰告白の部分で執行される。それは御言葉の説教の前でも後でも良い。礼拝が進行しこの聖礼典の箇所に来たならば、司式者は、受洗志願者に洗礼盤のところに来るように促し、それをもって式の開始としても良い。司式者と洗礼の執行を手伝う者は、それから洗礼盤のところに集まる。洗礼を主題とした讃美歌を一曲歌っても良い。

洗礼盤のまわりに集まった後、司式者は聖書の中から洗礼の深い意味について記されている御言葉を読むか、あるいは暗誦しても良い。イザヤ40章11節、使徒2章39節、マタイ28章18 - 19節、詩篇103篇17 - 18節、マルコ10章15 - 16節などは非常に適切である。他にも多くの相応しい箇所がある。

それから司式者は洗礼の意味について会衆全体にむかって話す。その際、司式者は、恵みの契約、罪の赦し、聖霊の注ぎを強調し、この聖礼典を通して信仰の家族の一員とされたことを宣言する。

幼児洗礼を受ける子どもの両親、あるいは洗礼を受ける信仰者は、次に、イエス・キリストを主また救い主として信じる信仰の告白を求められる。そして、キリストの教会の肢としてキリストに奉仕し、キリストに忠実であろうとする志を表明するよう求められる。洗礼を受ける子どもの両親はまた、子どもに神の愛を教え、子どもを信仰へと教え導き、その子が福音に忠実に生きるよう助ける意思を表明するよう求められる。

次の質問と答えは、上述の目的のために用いることのできる参考例である。

1．あなたの主また救い主は誰ですか。

イエス・キリストが私の主また救い主です。

2．あなたは、あなたの救いのため、イエス・キリストに依り頼みますか。

ただイエス・キリストにのみ依り頼みます。

3．あなたはキリストの忠実な僕となることを志しますか。

聖霊の助けのもとにそう志します。

次の二つの質問は幼児洗礼を受ける子どもの親に対してのみ用いられる。

4. あなた（がた）はあなた（がた）の子どもの洗礼を願いますか。

私の救いと子どもの救いのために深い意味を持つ、この洗礼を求めます。

5. あなた（がた）はあなた（がた）の子どもに洗礼の意味と神の愛、キリストの弟子として生きる意味を教えることを志しますか。

聖霊と信仰の共同体に依り頼み、そう志します。

次に、教会員が、洗礼を受けようとしている者をキリストの教会の一員として認め、受け入れ、その証人となり、援助を惜しまないかどうか問われる。例えば次のような質問を会衆に対して問うことができる。

あなた方は、神の民、キリストの教会の一員として、この新しい会員と福音の良き知らせを分かち合い、愛と同情を持ってこの人を包み、祈りと交わりと指導をもって援助することを約束しますか。

私たちはそう約束し、志します。

会衆の応答があったならば、司式者は次に会衆を祈りに導き、神の恵みと赦しに対して、その愛と憐れみに対して、そしてイエス・キリストの教会に対して、感謝を献げる。洗礼に関する他の聖書的主題を用いて祈りを豊かにするのも良い。それに加えて、水の祝福、受洗志願者への聖霊の注ぎを祈るのも、正しいことである。

祈りに続いて、司式者は受洗志願者の洗礼名を尋ねる。それから会衆は洗礼の行為のために起立する。

受洗者に水を注ぎ、あるいはかけて、司式者は次のように言う。

「_____、私は父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けます。ア - メン」。洗礼の行為の後、司式者は会衆に対しその責任について勧めを与える。それから讃美歌を歌っても良いし、あるいは、教会員からの証言がなされても良い。あるいは司式者が、キリスト者はいまや神の家族の一員であり、キリストの同労者であるという事実を証言しても良い。

受洗者の教会員としての受入れに関しては、小会は洗礼の行為の前に受洗者を受け入れても良いし、洗礼の行為の後でも良いし、あるいは後日の小会会議で決定しても良い。

感謝と執り成しの祈りをもってこの聖礼典を閉じる。祈祷は一同声を合わせて祈ってもよいし、黙祷でもよい。あるいは誰かを指名してもよい。それから祝福あるいは平和の宣言によって式を閉じる。

C. 主の晩餐と共同の礼拝

主の晩餐の聖礼典は、礼拝への付け足しと考えられるべきものではない。むしろ、それはキリスト教礼拝の中心と理解されるべきである。それはキリスト者の礼拝に独自の型を与えるものである。主の晩餐は頻繁に守られ、礼拝の中心であるということが皆に明瞭でなければならない。

主の晩餐において、神は、信仰を持って食卓に来る者たちに、キリスト者としての生活を守っていくのに必要な霊的栄養を与えて下さる。キリスト者の質と成長はこの聖礼典と分かち難く結び付いている。

この聖礼典はキリストの犠牲の死と復活の記念あるいは想起、以上のものである。それは、キリストによってその弟子たちのために制定された恵みの手段であり、それを通して、復活の主が今もなお力と現実として真にその民と共にいて下さるのである。キリストの犠牲の死の意味がこの聖礼典の中心にあるが、私たちがパンとぶどう酒を通して出会うのは、復活された生けるキリストである。

主の晩餐の執行の時と場所を定めるのは、そのキリスト者の群れを管轄する教会会議である。この聖礼典は自らの信仰を表明するものには誰でも与えられる。しかし、聖餐にかかるものは己の罪を告白し、互いに、また、すべての人間と和解し、謙遜と希望をもってキリストの食卓に着くことが奨励される。

主の晩餐の祝い

主の晩餐は礼拝に不可欠の部分として守られるべきものである。その執行は通常、御言葉の朗読と説教の後に行われる。

主の晩餐の祝いはキリストの「わたしのもとに来なさい」という招きを告げる聖書箇所を司式者が朗読あるいは暗誦することによって始めてよい。マタイ 11 章 28 - 30 節、同 5 章 6 節、ルカ 14 章 29 節、ヨハネ 6 章 35、48 - 51 節、同 10 章 10 - 11 節、黙示録 3 章 20 節などが代表的な箇所であるが、それ以外にも多く用いることのできる箇所がある。

讚美歌を歌った後、司式者が聖書の制定語を朗読あるいは暗誦する。これはキリストが主の晩餐を制定されたことを述べている聖書箇所で、1 コリント 11 章 23 - 26 節、ルカ 22 章 14 - 19 節、マタイ 26 章 26 - 28 節、およびマルコ 14 章 22 - 25 節である。

制定語の次は、感謝の祈りである。この祈り、そして感謝の強調はこの聖礼典にとって非常に重要なので、聖餐はしばしばユーカリストと呼ばれて来た。この呼び名は、新約聖書に出てくる感謝を意味するギリシャ語、ユーカリストゥに由来する。この祈りは神がイエス・キリストを与えて下さったことへの感謝、キリストの生と死、復活への感謝、そしてキリストがその民と共にいて下さることへの感謝である。伝統的にこの祈りは、私たちが復活の主と一つとされるよう聖霊の注ぎを求める祈りも含んできた。主の祈りが、感謝の祈りに続くのは相応しいことである。

司式の教職者はそれから、イエスの言葉を繰り返しながら、人々の前でパンを割いてもよい。「これはあなたがたのためのわたしの体である。わたしを記念してこのように行いなさい」。

次に司式者は、イエスの言葉を唱えながら、人々の前でぶどう酒を注いでもよい。「この杯はわたしの血による新しい契約である。飲む度に、わたしの記念として、このように行

いなさい。』

司式者と司式補助者がパンとぶどう酒の両方に与かり、それから他の礼拝者に配餐するのは正しいことである。配餐の間、讚美歌を歌っても良いし、聖句が読まれても良いし、あるいは沈黙を守るのも良い。

司式者はパンとぶどう酒を他の礼拝者に渡しながらか、「これはキリストのからだである。取って食べなさい。そして、キリストがあなたがたの罪のために死に、罪と死に勝って、よみがえられたことを覚えなさい」といっても良い。

および、

「これはキリストの血である。皆、この杯から飲みなさい。そして、キリストがあなたがたの罪のために死に、罪と死に勝ってよみがえられたことを覚えなさい。』

あるいは、

「イエスは言われた。『わたしは生命のパンである。だれでも私に来る者は飢えることがない。誰でも私を信じる者は渴くことがない』。』

および、

「イエスは言われた。『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。わたしから離れては、あなたがたは何もできない』。』

礼拝者全員が聖餐に与かったなら、「神の平和があなたがたと共にあるように」や「我らの主の恵みはあなたがたのものです」といった文句を用いて、司式者はキリストの恵みを一同に思い起こさせ、キリストの平和を宣言する。

礼拝者は次に詩篇を歌い、あるいは朗読し、または頌栄の歌を歌って神をたたえる。

その後に短い賛美と感謝の祈りを献げるのは適切である。祈りのあと讚美歌が続き、その後次のような言葉をもって勧めをなし、派遣してもよい。

「平和のうちに世界に出ていきなさい。神の民でありなさい。勇気を出しなさい。すべて善いことに堅く立ちなさい。悪をもって悪に返してはならない。勇気を失っている人を励ましなさい。弱っている人を支えなさい。困っている人を助けなさい。すべての人に尊敬と慈しみをもって接しなさい。聖霊の力によって喜んで主を愛し、主に仕えなさい。』

あるいは、

「いつも主にあって喜びなさい。あなたがたの寛容と慈しみと忍耐をすべての人に示しなさい。何ごとについても恐れることなく、いつも私たちと共にいて下さると約束して下さったキリストにすべて委ねなさい。神の平和がイエス・キリストにあってあなたがたの心と精神を支配して下さるように。」

式は祝福をもって閉じられ、会衆の「ハレルヤ、アーメン！」という応答があってもよい。

． 諸 式 と そ の 他 の 礼 拝

A．公の信仰告白

公の信仰告白は共同の礼拝の中で行われるのが望ましい。これは信仰者の子どもとして洗礼を受けている人にも、また、教会の外から来て信仰に入る人にも当てはまる。どちらも喜び祝うべきこと、神をほめ称えるべきことである。

この信仰告白は礼拝の中で、福音の説教の後、また、会衆の信仰告白の直前あるいはその一部として行われるのが適切である。言うまでもなく、信仰告白は主の晩餐の祝いよりも前に置かれるべきである。

個人の信仰告白を礼拝の中に取り入れる仕方は多様である。福音の説教の後にキリストの弟子への招きをし、その時に、信仰の告白をする人が前に進み出るのもよい。あるいは、事前にそれぞれ指導を受けてきた人々を、司式者あるいは長老が会衆に紹介するのもよい。保証人が告白者を前に連れてきて紹介するのもよい。どのような仕方で行うにしても、礼拝の目的と焦点が尊重されるべきである。それが礼拝の中断や妨げのようになることは許されない。

告白する人が自分で前に進み出たら、あるいは紹介されたら、その人に信仰の告白をする機会を与えなければならない。殆どの場合、これは、教会の古来の慣習に従って質問形式で行われる。しかしながら、質問形式の代わりに個人的信仰を言い表す機会を与えても良い。

公に信仰告白する人がその教会の会員となることを希望する場合は、教会契約の次の様式を用いることができる。

1．あなたは自分の罪を悔い改め、イエス・キリストをあなたの救い主、あなたの主として信じますか。

信じます。

2．あなたは旧新約聖書が靈感を受けた神の言葉であり、信仰と生活を導く権威の源であることを信じますか。また、あなたがキリスト者として生きていくための指針としてこれを読み、学びますか。

そのように信じ、約束します。

3．あなたは、礼拝に参加し、証しと奉仕の業を担い、カンバ - ランド長老教会の政治を支持し、また、キリストにある兄弟姉妹を愛することによって、この教会の忠実な会員となることを約束しますか。

約束します。

4．あなたは、この信仰の共同体の中で生きることによって、あなた自身の弟子としての献身を強められながら、誘惑と弱さに打ち勝ち、知識と恵みにおいて成長し、あらゆる関係において愛を實踐していくよう努めますか。

努めます。

5. あなたは、神があなたに託された人生と賜物、時間とお金の良き管理者となり、これらの与えられた宝を教会に捧げることを約束しますか。約束します。

上の様式に代えて、次のような教会契約を用いてもよい。

1. あなたの主また救い主は誰ですか。

イエス・キリストが私の主また救い主です。

2. あなたはイエス・キリストに依り頼みますか。

依り頼みます。

3. あなたはキリストの弟子となり、神の命令に従い、キリストに仕えることを志しますか。

聖霊の助けにより、そう志します。

4. あなたはキリストのからだの一部であるカンパ・ランド長老教会の忠実な会員となり、一各個教会の会員として礼拝と奉仕に加わり、あなた自身とあなたの時間、財産を捧げていくよう志しますか。

神の恵みにより、そう志します。

質問への答えあるいは証言の後に、司式者は信仰告白をした各人に次のように言って、イエス・キリストの弟子となったことを認める。

「_____、あなたはイエス・キリストの弟子です。あなたは私たちの同労者であり、またキリストの同労者です。それゆえ、すべてのキリストの弟子と共に、この世におけるキリストの救済の御業に参加する特権が与えられています。」

勧め、あるいは派遣が、この宣言に続いて良い。司式者は一回ごとに異なる勧めや派遣の言葉を用意しても良い。以下の言葉はその例である。

「主イエスは、『父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす』と言われました。キリストは、ご自身がこの世に派遣されたように、私たちをこの世に派遣されます。仕えられるためではなく、仕えるためです。あなたがたの人生が、そして私たちすべてがそうなりますように。」

あるいは、

「キリストの霊に満たされなさい。福音にふさわしく生きなさい。心からの遜りと柔和と忍耐を持ち、愛のうちに互いに忍びあい、平和のからだである教会の聖霊による一致を保つように努めなさい。キリストに倣うものとなりなさい。愛のうちに歩きなさい。」

この勧めの後、教会の小会は信仰告白を行った者を教会員として受け入れる決議をしても良い。あるいは礼拝のあと行われる会議でこれを決議するのも良い。この後、出席者全員が起立し、伝統的信条あるいは現代的信条を用いて、皆で共通の信仰を言い表すようにしても良い。

転入会あるいは信仰の再告白

以前に公の信仰告白をしていて、転会あるいは信仰の再告白によって教会へ加入するこ

とを希望する人がいる場合は、この時に転入会式を行う。既に小会がその人を受け入れている場合は、その人は単に紹介され認知される。まだその人が受け入れられていない場合は、その場でその人に転入会の希望を公に言い表すよう求め、それから会員として迎え入れても良い。その際、適切な質問は次のようなものである。

あなたはイエス・キリストを主また救い主と信じる信仰を再告白し、あなた の会員籍と忠誠をこの教会に移しますか。

この教会で神を礼拝し神に仕えることを喜び、そうします。

すべての人の信仰告白と転入会の意志が表明された後で、小会が、信仰の再告白をした人すべてを教会員として受け入れる決議をするのは適切である。あるいは小会は礼拝後の会議でこれを決議しても良い。出席者全員が伝統的信条あるいは現代的信条のうちの一つを用いて信仰を告白するのは、大変相応しいことである。

この後、その場に相応しい祈りが捧げられ、新しく教会員として受け入れられた人たちは、その教会が仕える人々へのイエス・キリストの御業に参与する者として迎え入れられる。

B . キリスト教の結婚

キリスト教の結婚は、互いに愛し合うことを誓い、互いに自分自身を捧げ、相互の貞節を約束し、夫と妻として共に生きる契約を結ぶ男女の関係である。キリスト者は、神が人類の福祉と幸福のためにそのような関係を定めてくださったと信じる。

結婚しなければ従順なキリスト者でないというわけではないし、実際だれもが結婚しなければならぬというわけではないが、キリスト者にとって結婚すること、また結婚を擁護することは正しいことである。結婚はイエス・キリストによって祝福されたものであり、教会の歴史を通して尊ばれてきた。それはあらゆる人々の間で尊重されるべきものである。

結婚は国家と教会の両方によって認知され定められる関係である。国家はこれを女性と男性と国家の間の市民的契約と考え、この契約に入る者にある法的制約を課す。さらに国は、年齢、健康、精神状態について多くの条件が満たされるよう求める。

教会は結婚を法的契約以上のものと考え、結婚はイエス・キリストにおける神の人間との関係になぞらえて作られた関係と理解される。結婚において、人は自分を相手に与え、非利己的な愛をもって相手を愛し、神の導きと摂理のもとで共に生きることの深い意味を経験するのである。

司式する教職者は、結婚しようとする女性と男性をカウンセリングすることが期待される。そのカウンセリングには、結婚の聖書的意味・相手に対する献身の確認・国の定める条件・結婚式の様式・二人の信仰者としての姿勢、などに関する指導が含まれる。

各教職者は、カウンセリングの結果を踏まえて、自分がその二人の結婚式を司式することができるかどうかを判断する。その決定をするにあたって、教職者は次のような事柄を

考慮すべきである。二人が結婚をどのように考えているか、イエス・キリストおよびキリスト教会との関係、結婚への情緒的・個人的・経済的適性、二人の結婚へ臨む姿勢。場合によっては、司式すべきかどうかについて判断をくだす前に、他の教職者あるいは信徒に相談するのが賢明である。

カンパ・ランド長老教会は、キリスト教結婚式を礼拝と考える。したがって、原理的には共同の礼拝に当てはまるものはすべて結婚式にも当てはまるわけである。焦点は神と神の言葉にあてられるべきであり、出席者は皆、礼拝に参加するのである。実際、結婚式が通常の礼拝の中で行われるのは大変相応しいことである。その場合、その男性と女性、および関係者は礼拝に出席し、説教の後、解散・祝祷の前のところで、前に進み出る。礼拝出席者全員に列席してくれるよう招き、解散・祝祷の後で結婚式を挙行するのも受け入れられる。

結婚式の不可欠な要素は以下のものである。(1)聖書の素材と主題に特別の強調をおいたキリスト教的結婚の意味の説明。(2)新しい関係に入る二人のための祈り。(3)キリスト教的結婚の理解に立つ女性と男性の間の誓約。(希望があれば)指輪の交換。(4)聖書朗読。(5)二人への勧告。(6)神の定めと国の法に従って男性と女性が夫婦となったことの公の宣言。(7)二人への祝福の宣言。

司式の教職者は奏楽に関して結婚しようとする二人にカウンセリングすべきである。結婚の儀式の中で用いられる音楽はすべて、結婚を聖別される神に焦点をあてたものでなければならない。会衆の讚美は入れたほうが良い。司式者がこの方面での技量と知識に欠けている場合は、十分な見識を持った音楽家に相談することが強く勧められる。

花や飾り付けを結婚式に加えることは可能である。しかしながら、必要以上に華美になったり高額の出費をしたりすることのないよう注意が必要である。

時として、既に法的には結婚している男性と女性が、神の教会において神からその関係に祝福を受けたいと願って来る場合がある。そのような時は、教職者はその夫婦と話し合い、もしその人たちがキリスト教の結婚理解を示し、彼らの結婚が神に祝福されることを純粋に願っているならば、普通の結婚式と同様に適当な式を行ってよい。それは通常の礼拝の一部として行ってもよいし、独立した式として別に行ってもよい。

C. キリスト教の葬儀

キリスト者は死が避けられぬものであることを認める。またキリスト教の福音は死の現実と経験を強力に伝える。キリスト者はキリストが死と墓に勝利されたことへの信頼を言明し、死がキリスト・イエスにおける神の愛から人間を引き離すことができないと謳うことを求められている。そのような信仰を持ってキリスト者は生き、また、死ぬのである。

キリスト者の死からの復活の信仰は、死の現実を否定し、人間が自分のうちに何らかの不死性をもっているかのように考える信仰ではない。それは、神の愛と力は死の力より大

きく、たとえ私たちが死んでこの世に存在しなくなっても、神の永遠のうちに新しい命、新しい存在を得る、という信仰である。キリスト者は、イエス・キリストが週の最初の日に死人の中から甦られたゆえに、この全てを確信するのである。

キリスト者の共同体は、死にゆく人々とこの世に残される人々に対して特別の責任を負っている。死が間近に迫っている人はキリスト者共同体から孤立させられるべきではなく、また共同体の人々はその人にまだ死ぬことはない信じさせようとしてはならない。そうではなく、その人は愛によって支えられ、神に愛され赦されている人として認められるべきである。

人が死亡した時は、直ちに教職者に知らせなければならない。教職者は、教会の他の人たちと同様、直ちに家族と連絡を取るべきである。そのような場面で大切なのは何を言うかではなく、その場にいるということ、そして誰を、また何を代表しているのかということである。教職者は遺族の必要をよく聞き、十分な配慮をしなければならない。最初に家族と接触を持った時に祈りを捧げることが望ましい。教会の担任教職者が行かない時は、一人またはそれ以上の長老が教会を代表して行くべきである。

教職者は、葬儀が宗教的行事であると同時に文化的行事であるということを知っておく必要がある。従って、教職者は各地域固有の死と死者の葬りに関する習慣に対して神経を配り、できるだけそれらの習慣を尊重すべきである。このためには二つのことが必要である。一つは、教職者の側で葬儀の多様な仕方についての適切な理解が持てるよう、葬儀社とよく協力しつつ進めることであり、もう一つは、教職者の神学的理解と執行方法について葬儀社におおよその理解をしてもらうことである。

キリスト教葬儀は礼拝であるから、礼拝として営まれるべきである。列席者は共同の礼拝に参加することが期待されるのであり、式次第の作成には良く考慮を払うべきである。讃美歌、聖書朗読、主の晩餐の執行は皆キリスト教葬儀に相応しい。そのような礼拝式を準備するにあたっては、遺族と協議し、礼拝の様式に遺族の希望を入れるべきである。キリスト教葬儀は教会で執り行なうことが強く勧められる。棺は礼拝中の間ずっと閉じられているべきである。

葬儀の礼拝を行うのに、遺体が必ずそこになければならないということはない。遺体のない礼拝も、棺が置かれている礼拝と同じように適切であり意味深いものである。そのような式は、もし遺体が埋葬されるのなら、埋葬式の前に営むこともできるし、後にもできる。

埋葬式は威厳と簡潔さを持って行うべきである。それは、聖書朗読と祈祷、キリスト者の希望の表明を内容とする短いものとすべきである。

死者の葬りに関するすべての事柄について、虚飾や過度の出費、死者の過度の化粧を避けなければならない。教会は、遺族が花に代えて、あるいは花に加えて故人記念献金を希望する時は、遺族の願いを受けれるのが良い。教会で葬儀を行うときは、棺に覆いをかけることが強く勧められる。

キリスト者は、死者の体の処置について、受け入れられる幾つかの方法について良く考える責任がある。死が間近に迫る前にこのことを良く考え、自分の死後どのようにしてもらおうか決めておくことが求められる。生前に決定がなされていない場合は、家族が教職者の援助のもとに各方法を検討すべきである。土葬、火葬、医療目的のための献体は、どれもキリスト教的な遺体の処置である。

D．個人礼拝と家庭礼拝

各個人と各家庭は、祈りと聖書朗読のため、黙想と自己省察のために定まった時間が取れるように生活を整えるべきである。祈りの本質と性格およびその実行に関する解説と指導は、教会、特に教職者に求めるべきである。弟子たちがどう祈ったらよいのかイエスに教えられたように、すべての人間がどう祈るか教えられなければならない。

家庭礼拝もまた定期的に守ることが勧められる。家庭礼拝を準備する時は、家族全員のことを考慮にいれ、全員が礼拝に参加できるように礼拝を組み立てるべきである。創造性と想像力が求められる。色々な内容や形を試みるのが望ましい。教会に指導を求めるべきである。

個人や家庭にとって、その行う礼拝が神の家族たる教会の礼拝の一部であることを覚えているのは常に大切である。キリスト者の礼拝に私的な礼拝というものは存在しない。それはいつも、生者と死者からなる雲のような証人の群れ、すなわち公同の教会の礼拝の一部である。人は、イエスの名によって、キリストのからだであるその教会の一部として礼拝するのである。